特集Ⅰ　比較文化研究

現代における「翻訳」の問題

── いま仏和辞典を作ることは何を意味するか ──

西　川　長　夫

1．はじめに

「翻訳」の問題にかんするわれわれの関心は長い間，文学作品の翻訳にかんする技術的な問題に集中していたように思います。いかなる国のいかなる作品が，いかなる国で，いかなる言語によって，いかに翻訳され，それは成功したか失敗したか，つまり良い翻訳か悪い翻訳か，正しい訳か誤訳か，あるいはその翻訳は同時代や後世にいかなる影響を与えたか，といったことがしばしば問われてきました。

しかしながら今回の国際シンポジウムで問われているのは，より広くより本質的な問題ではないかと思います。例えば，プログラムを眺めただけでも，翻訳の行為とは何か，何かを翻訳するとはいかにして可能であるか，翻訳の創造性，翻訳は近代の言語，国語や国民文学，国民文化あるいは科学と呼ばれているものに何を与えたか ── とりわけ「翻訳」をテーマにしたシンポジウムで辞書や科学の記述の問題が論じられることは注目に値いすると思います ── 等々といった，新鮮で興味深い問題が提起されており，大きな期待を抱かせます[1]。

私は，現在われわれが直面している翻訳の諸問題を，歴史的文脈のなかで，すなわち資本主義的であると同時に国民主義的な世界システムと，今日世界を覆いつくした国民国家のシステムに由来する歴史的な現象として考察し，近代における翻訳を可能にし，あるいはそれを必要としている歴史的社会的制度的な基盤を考えることから始めたいと思います[2]。

私の考えでは，近代の国民国家は，広い意味での「翻訳」の一形態であり，「翻訳の諸結果」の一つです。じっさい中国や日本の例が示しているように，近代国家を作るためには実に多くの新しい概念とそれを表わす用語の翻訳を必要としました。日本や中国のような後発国では，国民国家は，あたかも翻訳が特定の歴史的言語的条件の下で行なわれるように，その時代の世界システムのなかで，先行する諸国家によって

示されたいくつかのモデルに従って，移植・形成されたからです。他方，狭い意味での「翻訳」は，「国民文化」の形成に際して実に大きな役割を果たしました。各国の国語や国民意識の形成，文化的差異の認識は，翻訳を通して行われたと言ってよいと思います。

フランス革命以来，地球を覆いつくすことになった国民国家群は，世界資本主義と国際関係の圧力によって，類似の国家装置とイデオロギー装置を持つことになりました。近代の文明／文化や社会，政治，経済，そしてとりわけ国家にかんするさまざまな概念の翻訳は，そうした国民国家の時代の共通性の上に成りたち，またその共通性を作りだすために必要であったのです。文明，文化，国民，民族，革命，権利，自由，社会，個人，家族，家庭，芸術，美，恋愛，自然，等々，国民国家の建設にかかわる多数の用語は，こうして日本においては幕末から明治にかけて，主として英語やフランス語そして時にはイタリア語やドイツ語からの翻訳語ですが，その翻訳にさいしては，中国の古典にある漢語が用いられました。そのことは日本における近代化が，漢字文化圏からの離脱であると同時に，漢字文化の力を借りて行われたことを意味します。じっさい幕末・明治期の日本の知識人やエリート階級は，西欧の近代的な諸概念を漢字に翻訳することによって，あるいは漢字に翻訳された知識を移入することによって，理解しようとしたのです。そして，日本で翻訳＝合成された，これらの近代的概念を表わす用語は，近代科学や哲学の用語なども含めて，中国やその他の漢字文化圏の諸国（朝鮮，台湾，ベトナムなど）の近代化に際して逆輸入される。もし，17，18世紀ヨーロッパの文明概念形成に，中国文明の影響が認められるとすれば，こうして翻訳を通して近代的諸概念の形成と移植をめぐる一つの環が，中国と日本とフランスをめぐって成立することになるでしょう。

現在の東アジアの国民国家群は，そうした「翻訳とその諸結果」であると言えますが，しかしそのことは東アジアに限らず世界の諸国家について多少とも当てはまることです。世界の国民国家の類似性は，諸装置や諸制度，あるいはイデオロギーをも含めた国民国家の移植可能性（私はそのことをB.アンダーソンの用語を借りて「国民国家のモジュール性」と呼ぶことにしています）を証明しています。われわれはそれを「国民国家の翻訳可能性」と呼ぶこともできるはずです。つまり世界の諸国家は，広義の翻訳の結果として存在している。

だがここで忘れてならないのは，この翻訳は必らずしも両者の平等な関係を表わしてはいないということです。翻訳や，私が以下に取り扱おうとしている仏和辞典のような二国語辞典は，良きコミュニケイションを目指す二国間の友好関係や文化交流，

あるいは二文化の混淆による新しい文化の創造を一応は意味しています。だがそれは同時に，そしてしばしば，世界の国家間システム（I. ウォーラースティンの interstate system）における国家の序列に従って，不平等で差別的な関係をも表わしています。翻訳にかんする論議は，このあまり愉快ではない側面を見逃すことが多いようです。翻訳のこうした側面が意識化されることは決して容易ではありません。

一例をあげましょう。1960年代にジャン＝ポル・サルトルがシモンヌ・ド・ボーヴォアールと初めて日本を訪れた時のことです。ある新聞の報道によれば，サルトルは日本の翻訳者の得る報酬が非常に多く，時には原著者の印税よりも高いことを知り，立腹したということです。この記事が正確であるとすれば，日本の翻訳者の収入が多いのは国際関係におけるこの国の劣位と半植民地的な状況を反映しているということ，また，もしフランスの翻訳者の報酬が少ないとすれば，それはフランスという国の世界システムにおける優位を表わしており，サルトルの著作はそうした世界システムにおけるフランスとフランス語の優越性の結果（もちろん著作が優れていることは言うまでもありませんが）として翻訳され広く読まれるようになったのだということについて，サルトルはあまり意識的でなかったのではないか。私は当時そういう印象をうけました。

以上，見てきたようにとりわけ近代の翻訳は，歴史的社会的な現象です。しかしながら翻訳をめぐるこうした状況は，しばらく前から，国民国家の構造と世界システムの変化に伴って変化しはじめているのではないか。——

以上が私の報告の主題です。だが，抽象的な議論を避けるためにこの報告では具体的な一つの事例として，日本における仏和辞典の歴史と，私自身が5，6人の同僚といっしょにこの30年ほどかかわってきた仏和辞典編纂の経験をお話したいと思います。

2．歴史的現象としての翻訳 —— 仏和辞典小史（1）

日本における仏和－和仏辞典の歴史を語ることは，結局，西欧世界との交渉が始って以来の日本が置かれた国際的な位置とその変化を，日仏関係に焦点をしぼって語ることになるでしょう。だがここでその450年にわたる歴史をくわしく述べることはできません。ここではその歴史を大きく5つの段階に分けて，要約的に示しておきたいと思います。

第1期は，日本人の視野にはじめて西欧世界が現われ，やがて文物の交流が始った

時代で，中国船に乗ったポルトガル人が種子島に漂着した1543年９月23日から，江戸幕府が鎖国体制を完成させる1639年に至る時代です。最初のポルトガル人の渡来以降，急速に交易が始まり宣教師が日本を訪れるようになりました。

言うまでもなくポルトガル人やスペイン人の日本渡来は，大航海時代の西欧の膨張の余波が極東の地の日本にも及んだことを意味しますが，幸なことにアメリカやその他の世界の各地で起った戦争や虐殺といった深刻な事態は当座は起こらず，しばらくは平和な交流が続きました。それまで日本人の世界は日本の他は中国と印度に限られていたのですが，このとき以来，日本人の世界は地球大に拡がったのです。南蛮人の渡来は，鉄砲や医学に代表される科学技術，キリスト教，そして世界地図をもたらしました。「南蛮屏風」と呼ばれる16，７世紀の風俗画は，このおそらく例外的に幸運な東西の交流を描きだしています。翻訳の観点から見れば，もちろん通訳は必要であったし，宣教師にとって聖書の翻訳（聖書の用語を仏教の用語を借りて信者に理解させる）の試みもありましたが，物品や風俗の交流も広義の翻訳とみなすべきでしょう。私の住む京都にはポルトガル語に由来する地名や何種類かのお菓子や食べ物などの名前（先斗町，コンペイ糖，テンプラ，バッテラ，ヒリョウズ，等々）が残されています。ただしフランスはまだ現われず，したがって仏和辞典にとっては前史と言うべき時代です。

第２期は，鎖国の時代から開国にかけての時代です。江戸幕府は西欧列強との交流の危険を察知して1639年には鎖国の体制を完成させ，それ以後は長崎の出島に移されたオランダ商館が外国に開かれた唯一の窓口となります。したがって鎖国体制が250年近く続いたあいだ，日本で使われた唯一のヨーロッパの言葉はオランダ語であり，西欧近代にかんする知識はオランダ語（蘭学）を通じて日本にもたらされました。そしてオランダ語の通訳や翻訳にあたったのは，長崎に集ったオランダ通詞たちでした。日本におけるこの時代の外国語とはオランダ語です。

そうした鎖国体制の中にフランス語が入りこむについては興味深いエピソードがありました。1804年ロシア皇帝の侍従で国務大臣であったニコライ・ペトロゥィチ・レザーノフはロシア使節として長崎に来航し，通商関係を結ぶことを求めますが，拒否されます。その二年後レザーノフの命を受けたフヴォストフ海軍大尉はフリゲート艦二隻を率いてサハリン南部をはじめ日本人が住んでいる北方の村落数カ所を襲いました。そのときフヴォストフが残した松前奉行あての，強引に通商を求める文書がフランス語で書かれていたのです。長崎のオランダ通詞たちはこの文書を読解できず，最後にはオランダ商館長のヘンドリック・ドゥーフのもとにもちこまれました。この事

件がきっかけとなって長崎の通詞たちのあいだにフランス語を学習しようという気運が起こります。幕府も国際語としてのフランス語の重要性に気付いてオランダ通詞たちにフランス語の学習を命じました。だがこのフランス語学習は長続きしません。半年後（1808年８月）に，オランダ船をよそおったイギリス船「フェートン号」が長崎湾に姿を現わし，食物などを掠奪するという事件が起こり，幕府は今度はイギリスへの対応に追われて，長崎の通詞たちにフランス語の学習を中止して英語を始めることを命じたからです。もっともこの通詞たちのなかに，英語の学習を経たのち（英語の学習はその６年後の1814年には最初の英和辞典『暗厄利亜語林大成』15巻を脱稿するまでになりました），フランス語の学習を再開する者たち（本木庄左衛門正栄，栖林彦四郎，吉雄権之助など）があり，やがて彼らによって最初の仏和辞典『払郎察辞範』４冊，続いて三語対訳辞典『和仏蘭対訳語林』５冊が編纂されます（未出版，完成した日付も不明）。

日本で最初に出版された仏和辞典は，村上英俊の『仏語明要』（1864年，全４巻，740頁）です。「フランス学の祖」と呼ばれている村上英俊（1811－1890）も，最初は蘭学者でした。医学を学ぶために，オランダ語の学習から始めなければならなかったからです。

村上英俊がフランス語を始める契機についても面白いエピソードがあります。火薬製造に関心をもった英俊は，ベルセリウスの『化学提要』をオランダから取り寄せたのですが，どうしたことか手元にとどいたのは，『化学提要』のフランス語版であり，彼は一語も理解できなかった。当時のことですから，改めてオランダ版を取り寄せるには時間も費用もかかります。そこで彼はフランス語を学ぶ決心をしました。彼の出身地である松代藩の蔵書のなかに一冊の蘭仏辞典（ヘンドリック・ドゥーフが残したものと考えられています）を見出した村上英俊は，その辞典を毛筆で筆写することから始めて，ほぼ16カ月をかけて『化学提要』の仏語を読破したということです。

村上英俊は『仏語明要』（1864年）を出す前に『三語便覧』（仏英蘭語対照辞典，1854？）『五方通語』（仏英蘭羅日の５語対照辞典，1857年，和綴三冊本）を出版しており，さらに『仏蘭西詞林』を松代藩主（幸田幸教）に献呈しています（1857年）。彼は他に英語とフランス語の発音にかんする書物「洋学捷径仏英馴弁」（1855）やフランス式兵法の翻訳（シャルル・ガブリエル・ダルサック・テルナイ著『戦術提要』1832年，『仏蘭西答屈知畿』全３巻，明治初年？），西洋史の『西洋史記上古史』（明治３年）（ジャック・ルイ・ダニエル著『万国略史』（1865年）の初めの部分）などを出版しています。英俊は日仏修好通商条約の翻訳にもかかわっており

(1858年)，後にレジョン・ドヌール・シュヴァリエ勲章を授けられました（1885年)。

村上英俊が活躍した時代は，オランダが覇権を失って日本における蘭学の時代が終り，アメリカやロシアの他にも英仏独といったヨーロッパの列強が注目されはじめた時代であり，日本における洋学の中心も，長崎から江戸に移っていました。

第３期は19世紀後半，明治と呼ばれる時代です。幕末（開国）から維新期にかけて，フランスはようやくその本来の姿を認識されはじめたと言ってよいでしょう。フランス人宣教師，ジラール，メルメ・ド・カション，レオン・パジェス，プチジャンなどの日本各地におけるフランス語教育，なかでもカションによる仏英和辞典(Mermet de Cachon; Dictionnaire Français-Anglais-Japonais, Paris, F.Dipot Frères, 1866)，パジェスの和仏辞典（Léon Pagès; Dictionnaire Japonais-Français, Paris F.Dipot Frères, 1868）などはフランス人を対象にしたものですが注目に値します。蘭学の研究を目的としていた幕府の蕃書調所（後に洋書調書，開成所）でもフランス語の研究が始められ，それは維新政府にも引きつがれます。しかしながらそのことは明治時代に優れた仏和辞典が作られたり本格的なフランス語研究が行われたことを意味しません。明治維新（1868年）以後，かなりの数の仏和，和仏事典が出版されていますが，英語やドイツ語の辞典に比べると質量ともに劣っています。そしてそのことは，フランスの国際的地位の低下や，明治政府の対外・対内政策の変化に深くかかわっています。末期の幕府がフランスの援助を受け，維新を実現することになる反幕府勢力がイギリスの援助を受けたことは周知の事実ですが，明治政府の近代化政策は，特にフランスの普仏戦争敗北（1870）以後は，フランス・モデルを排して，英米モデル，あるいはドイツ・モデルを採用するようになり，フランスに対する関心は，次第に芸術や文学の領域にせまく限定されていきました。[3]

第４期は，大正と呼ばれる時代から第二次大戦にかけての時代です。現在われわれが外国語辞典という言葉で思い描くような近代的な最初の仏和辞典は柳川勝二他編の『模範仏和大辞典』白水社，1921年（大正10年）でしょう。村上英俊の『仏語明要』(1864）が出てから半世紀以上も経ってからです。この2000ページを越える大仏和辞典（三六判相当，縦長2176ページ）の出版の背景には，第一次大戦（日本は参戦し勝利国の一員となりました）後の自由主義的（大正デモクラシー)，欧化主義的（明治初期の文明開化の時代に続く第二の欧化主義）な時代におけるヨーロッパの文物の流入，フランス文化に対する関心の高まり，フランス語学習者の増加などがありました。そしてこの『模範仏和大辞典』刊行の12年後（1937年）に，より小型のハンディーな二冊の仏和辞典がほぼ同時に出版されます。丸山順太郎編『コンサイス仏和

辞典』（三省堂，1002頁）と井上源次郎・田島清編『新仏和中辞典』（白水社，815頁）です。多くの労力と時間を要する辞書は，つねに時代の流れから一歩遅れて出現します。時代はすでにヨーロッパ文化が排斥される国粋主義的な軍国主義の時代に入っていました。それ以後ほぼ20年間は新しい際立った仏和辞典の出版はなく，フランス語学習者の大部分はこの二冊の辞書のいずれかを使っていたと思います。私自身が大学に入ってフランス語の勉強をはじめたのは1954年ですが，そのとき手元にあったのはこの二冊でした。『コンサイス仏和辞典』はどちらかと言えば実用的，一般向きで，『新仏和中辞典』はページ数は少ないが判型は少し大きく，どちらかと言えばフランス語やフランス文化をもう一歩進んでやや専門的に勉強する人達を目標にしていたように思います。はじめに一つの単語に対応する数多くの訳語が列挙されていたのが印象的でした。仏文和訳に便利な，フランス語の学習がもっぱら文学作品の翻訳（仏文和訳）を目指す時代を象徴するような辞書でした。[11]

3．歴史的現象としての翻訳 ── 仏和辞典小史（2）

第5期は第二次大戦後です。とりわけ敗戦後の十数年は大正時代に次ぐあるいはそれ以上の欧化主義の時代で（第三の欧化の時代），大正時代の欧化主義がどちらかと言えばドイツ文化中心であったのに対して，1945年以後はアメリカ化を別とすればヨーロッパに関してはフランス文化の移入が中心になりました。スタンダールやバルザック，プルースト，ジッド，ロマン・ロランといったフランスの19，20世紀の大小説家の作品が次々と翻訳される一方で，サルトルやカミューの哲学が流行しました。日本の作家の作品よりも翻訳の方が多く読まれ，日本映画よりも洋画が好まれた時代でありました。フランス語の学習者の数も多く（英語，独語に次いで第三位），フランス語研究も目覚しく進歩しました。

そうした時代的潮流のなかで，1957年，鈴木信太郎他著『スタンダード仏和辞典』（大修館書店，1627頁）が出版されます。戦後12年，大正期の『模範仏和大辞典』から35年，ようやく現われた画期的な仏和辞典です。私はまだ在学中でしたが，あの黄色い表紙の辞書をはじめて手にしたときの感触をいまも鮮明に覚えています。決して大型ではないのにずっしりと重いこの辞書は，当時の日本におけるフランス語研究のすべての成果とフランス語にかんするあらゆる知識が，細い活字でびっしりと詰めこまれているような感じを与えました。それ以後フランス語を本格的に学ぶ者は，皆がこの辞書を持つことになります。だが『スタンダード仏和辞典』は学生には使いにく

いきわめて不親切な辞書でした。語義は歴史的に配置されており，例えばassietteを引くと，まず初めに馬の乗り方にかんする古い語義があって，現在普通に使われている語義は20行ほども後に，ぽつっと一語「皿」と出ている。これは同業者，つまり少数の語学研究者のための辞書であっても，フランスの現在の文化や日常生活を知りたいと思っている一般学生のための辞書ではありません。すでに大学の大衆化が進行しており多数の学生（1時は20万を越える）が，一般教養科目の一つとして外国語を学ぶ状況のなかで，初期の（今は内容がすっかり変わっています）『スタンダード仏和辞典』は，あまりにも学者的な自己満足と権威主義をあらわにした辞書であるように思われました。

こうした状況のなかで，私たちが数人の仲間と，一般学習者向けの新しいタイプの仏和辞典の必要性と可能性を考え始めたのは1967年から68年にかけて，ちょうど今から30年前です。この辞書はそれから10年の歳月をかけて1978年に出版されました。『クラウン仏和辞典』の初版は，今から思えば実に欠陥の多い辞書ですが，当時私たち編者が予想していたよりもはるかに大きな反響がありました。当事者の主観的な判断を避けるために，田島宏「フランス語の辞典のはなし」（辞書教会編『日本の辞書の歩み』1996年所収）から引用させていただきます。

「1978年，大槻鉄男他4名編の『クラウン仏和辞典』［三省堂］が鮮かな白い表紙をつけて現われた。1460ページの学習仏和ではあるが，この辞典の刊行に，フランス語関係者――特に教育関係者は「あっ」と驚き，「ウーン」と嘆声をあげた。生きたフランス語の語彙・表現を積極的に収録，その語義分類は使用頻度に従って行われ，平易でシックな用例を添えたこの辞典は，それまでにはなかったモダンな仏和だった。そして，それからしばらくは学生たちのもつ仏和はもっぱら『クラウン』ということになる。」（P.160）

上の文章にもあるように「生きたフランス語」と「学習者に使いやすい」を二つの主要なモットーにかかげた『クラウン仏和辞典』は，その目標にいっそう近づくために，そしてまたフランス語と日本語の時代的な変化に対応するために，5年毎に改定を重ね，第2版からは「仏和インデクス」を付けるなど，それ自体変容を続けています。またその後，他にも優れた学習仏和辞典，例えば福井芳男他編『ロワイヤル仏和中辞典』（旺文社，1985年），山田爾・宮原信監修『現代フランス語辞典 Le Dico』（白水社，1993年）等々，大辞典としては例えば，伊吹武彦他編『仏和大辞典』（白水社，1981年），大賀正喜他編『小学館ロベール仏和大辞典』（小学館，1988年）等々，あるいは仏和辞典としては鈴木信太郎監修『スタンダード和仏辞典』（大修館書店，

1970年）など，多数の仏和・和仏辞典が出版されており，先ほどの田島宏氏の表現を借りれば，1990年以後は「百花繚乱の時代」となりました。

したがって私はここで自分たちの作った，あるいは現に作りつつある仏和辞典（現在第5版の改定作業が行われています）の特徴をこれ以上数えあげることは慎みたいと思います。ただ一つ自慢を許していただけるなら，1978年の『クラウン仏和辞典』の出現は，日本における仏和辞典の概念を根本的に変えたということです。そのことは『クラウン仏和辞典』の以前と以後の諸仏和辞典を読みくらべていただけば明らかです。われわれ編者にとっては，それは『クラウン仏和辞典』の影響の大きさと言いたいのですが，一歩譲って，われわれの仏和辞典が大きな時代転換の先取りをしていたのだ，と言ってもよいと思います[5]。

4．仏和辞典の歴史が語ること

以上が日本における仏和辞典の歴史の概略ですが，次にこうして仏和辞典の歴史をたどることによって明らかになったいくつかの注目すべき点について，私の考えを述べさせていただきます。

第一は，辞典は時代の流れを（数年のタイムラグをもって）敏感に映しているということです。仏和のような二国語辞典は，両国の関係だけでなく，世界的な国際関係を反映しています。仏和辞典が最初はオランダ語や英語を介して作られたのは，日本が置かれた国際的な位置によるものであり，世界の列強の力関係の極東の地における配置の結果でありました。また仏和辞典の編纂が第一次大戦や第二次大戦後のいわゆる欧化主義の時代に集中することも，日本の対外政策との関連を思わせます。日本の国際的な地位や近代化政策は，当然のことながら，辞書の内容に影響を及ぼしますが，それと同時に翻訳者や辞書編纂者の社会的地位にも影響します。幕末・明治初期の翻訳や辞書編纂は，個人の仕事というよりは国家（政府）の事業であり，翻訳者はある種特権的な地位にありました。翻訳が国家の手を離れてジャーナリズム，つまり出版資本の手に移ってからも，翻訳者は特権的な地位にあったと言ってよいでしょう。

明治以来，日本の作家や文筆家は400字（あるいは200字）詰めの原稿用紙に書く習慣を維持してきました（実は私もこの報告のための原稿を400字の原稿用紙に書いていますが，この習慣はワープロの普及によって崩れつつあります）。この原稿用紙は，初めは専ら翻訳のために用いられ，翻訳者は400字1枚当り驚くほど高い翻訳料を

取っていたのです[6]。私はこの報告の初めに，来日したサルトルにかんするエピソードを話しましたが，この高い翻訳料の名残は1960年代にまで続いていました。近代中国の場合はどうでしょうか。翻訳の隆盛を異文化交流のめでたい表われとだけ考える見方は一面的です。翻訳の隆盛は，時にはその国の置かれた国際関係における劣位と植民地的状況を表わしているからです。翻訳という歴史的現象は多くの場合，二言語間の不平等な関係を示しています。

第二に，上に述べたことに関連しますが，翻訳や辞典，とりわけ外国語辞典の歴史は，国内における教育制度やジャーナリズム，すなわち国家のイデオロギー装置のあり方に深くかかわっています。仏和＝和仏辞典の出版とその内容は，日本の広義の教育制度やジャーナリズムのなかで，フランスという国，フランス学やフランス語がどのような位置を占めているかと密接にかかわっています。近代日本のエリート知識人は外国語を学習することによってエリート知識人になりました。近代以前の中国との関係を考慮に入れれば，それはほとんど日本古来の伝統であると言ってもよいでしょう。しかも明治維新以後は，列強のどの国の言語を学習するかによって，その人間の将来のコースがほぼ決定される。陸軍はフランス語を，海軍は英語をという一時期がありました。その後は文学や芸術を志す学生の多くはフランス語を学ぶが，官僚や医者や技術者を目指す者はドイツ語や英語を，といったぐあいです。第二次大戦中は英語やフランス語は「敵性言語」として排除されました。現在の日本では，国際化やグローバリゼイションといった言葉が流行する一方で，外国語教育を一般教養からはずして，英語以外は少数の専門家にまかせようとする傾向が強く（大綱化），大学におけるフランス語の学習者数は半減しています。欧州連合諸国における外国語学習奨励（もっとも域内の言語が大半のようですが）とは大変なちがいです。

第三に，外国語辞典の編纂はさまざまな意味で翻訳であること。外国語辞典は，翻訳のための道具であり，翻訳の基礎になるものですが，その辞典そのものは外国の国語辞典や外国語辞典の翻訳であると言えるでしょう。最初の仏和辞典『払郎察辞範』の編纂にかんしては，オランダ通詞たちの先生でフランス語にも通じていた，オランダ商館長ヘンドリック・ドゥーフの援助とピーター・マリンの蘭仏辞典（Pieter Marin; *Nouvelle méthode pour apprendre les principes de l'usage des langues Française et Hollandaise*, Hendrik Botter 1790）の存在が知られています。村上英俊のフランス語学習と仏和辞典編纂の背後にも，明確に特定はできないが蘭仏（あるいは蘭英）辞典があったことはたしかです。近代的な最初の仏和大辞典『模範仏和大辞典』（1921）は主として同時代の Petit Larousse Illustré を底本としていました。『コンサイス仏和

辞典』(1937) と『新仏和中辞典』には，Larousse du XX' siècle とイギリスの J.E.Mansion, Harrap's Standard French and English Dictionary,『スタンダード仏和辞典』(1957) には Litté と Hatzfeld et Darmster などの辞書がありました。先に引用した田島宏氏は，これらの仏和辞典は「辞書から作られた辞書」の印象が拭くいきれてはいなかった (p.158) と記しています。1978年に出た『クラウン仏和辞典』の場合には，1960年代後半に出版された Dictionnaire du Français contemporain と Petit Robert から得たものが大きかったことは否定できません。最近は仏和辞典の編纂にフランス人が加わることが多くなっており，また参考文献や参照する辞書の数も多くなっていますが，基本的に「辞書は辞書から作られる」と言えるのではないかと思います。特定の辞書を指摘できない場合にも，外国語辞典編纂者の念頭には，その国のありうべき理想的な国語辞典のイメージと，他方には依拠すべき日本の国語辞典のイメージがあるはずです。

第四に，外国語が日本語に与えた影響とそこで外国語辞典が果した役割についてです。開国と文明開化に際しては，つまり日本が独立した国民国家として世界システムに参入してゆく過程においては，莫大な数量の西欧の言葉と概念を翻訳し，それを日本語として定着させてゆく試みが必要でした。それは日本語の語彙の体系だけでなく統辞法にも大きな変化をもたらしました。外国語辞典は新しい訳語を提示するとともに，それを日本語として定着させる役割を果たしたのです。

幕末から明治初年にかけて，事項別の外国語辞典から ABC 順の辞典へという流れがあることは注目すべきだと思います。はじめは，医学とか化学とか兵法とか法律などといった特定の，実用的な領域の翻訳と翻訳語（術語）が必要とされ，それがやがてその言語（国語）全体への関心へと進み，西欧的な概念における辞典が作られるようになる。そしてその歩みは日本の国語辞典編纂の歩みと呼応しています。

またその一方で，翻訳語の時代から翻訳文体の時代へという流れも観察できます。この流れはより広く，日本における近代語（国語）の形成というコンテクストの中で考察した方がよいでしょう。西欧の新しい概念が漢字を用いて翻訳されたことの歴史的背景として，それまでの日本の知識人の自己表現は漢文によってなされており，近代的な意味での日本語はまだ成立していない，ということを念頭においた方がよいと思います。男は漢文，女は平仮名という伝統もありました。

翻訳は漢字や片仮名を使った独特な語彙を生みだしただけでなく，翻訳文体と呼ばれる特殊な文体を生みだしました。翻訳文体が確立するのは，明治の後半から大正時代にかけて，つまり20世紀に入る前後で，最初の「仏和大辞典」の編纂がその時代を

象徴的に示しています。翻訳文体が一般化するためには，翻訳が一つのジャンルとしてジャーナリズムに大きな地位を占める必要があったはずです。

二葉亭四迷から大江健三郎に至るまで，日本の近代作家は翻訳文体の強い影響下にある。あるいはむしろ翻訳文体で書いている，と言ってよいでしょう。二葉亭は日本でほとんど最初の近代的な意識をそなえた翻訳者（ツルゲーネフ，ゴーゴリ他のロシア文学）であると同時に，近代的な文体を創出した小説家でした。彼の翻訳や小説，あるいは評論を通して，近代日本語の創出がいかに苦難に満ちたものであったか，また近代日本の翻訳と創作がいかに密接に結びついていたかを知ることができます。大江健三郎については説明の必要はないと思いますが，彼が常に外国の作家や詩人の強い影響下にあったこと（サルトル，ノーマン・メイラー，ブレイク等々），また社会的体験や実生活よりは，文学から文学を作るタイプの作家であったことだけをつけ加えておきましょう。

だが翻訳文体の問題は，文学作品でなく，ジャーナリズムの文章や学術論文についても言えることですし，一般民衆の日常会話においてさえ翻訳の影響は大きい。二葉亭四迷は最初の小説『浮雲』（1859）で「言文一致」の実験をしていますが，それがいかに困難な試みであったかを後に語っています。「言文一致」つまり「話し言葉 langue parlé」のモデルをもたない二葉亭は自作をロシア語で書いて翻訳するというような試みをする一方で，圓朝の落語や式亭三馬の作中に見出される「深川言葉」，つまり江戸弁を参考にして取り入れたとのことですが（「余が言文一致の由来」），そうした証言自体が「言文一致」体は，決して実際に話されている言葉ではなく文章の中で「作られた言葉」であることを示しています。二葉亭には「国民語の資格を得ていない漢語は使わない」，「日本語にならぬ漢語は，すべて使わない」[7] という原則があったものの，何が「国民語」であり，何が「日本語」であるかについては答える術がなかった。「国民語」や「日本語」は作られつつある未知の言語であったからです。[8] したがって，われわれは話し言葉と文章の関係をむしろ逆転させて考えるべきでしょう。言文一致体とは決してどこかある場所で話されている言葉ではなく，近代的な文章の中で作られた言葉であり，人々はやがてその作中で「作られた言葉」を現実に話すようになった，と。いくらか誇張して言えば，日本人は新しい言語を話すようになるのであるが，それはあたかも翻訳された作品の中で人物が話すようにである。あたかも現実がフィクションを模倣するかのように，と言ってよいでしょう。しかも話し言葉と書き言葉の変化は早く激しい。その変化の指標の一つは，今なお外来語によって示されています。（中国や日本には数多くの「外来語辞典」が出ています

が，フランスでは見かけません。)

こうした言語にかんする歴史的体験は，日本語と呼ばれている単一言語の複合的・複数的な性格を改めて考えさせはしないでしょうか。だがこのような言語の歴史的状況は必らずしも日本語に限らないはずです。現在のこうした言語状況は，国語辞典や外国語辞典の編纂に重大な問題をつきつけています。

5．仏和辞典の編纂は今日はたして可能であろうか
── ポスト国民国家における翻訳の問題

いま国語辞典や外国語辞典の編纂は，きわめて大きな難問に直面しています。そのことを最後に，私自身の仏和辞典編纂の経験にもとづいてお話ししたいと思います。すでにお話ししたように私たちの仏和辞典は，決して大辞典ではなく，初版の収録語数45,000，1460ページ（現在の第4版は1754ページ）の学習者向けの辞典です。だが最初から「生きたフランス語」と「学習者に使いやすい」というモットーをかかげた結果として，現代の辞書編纂の難問をまともに引き受けることになりました。この二つのモットーは初版当時はおそらく革命的であったが，今日では大部分の外国語辞典が採用している原則だと思います。いろいろ問題は多いのですが，問題をこの二つのモットーが導きだした難問に限ってお話ししたいと思います。

はじめに「学習者に使いやすい」という原則ですが，それは単に学習に便利だということを意味しません。この原則は学習の内容の批判的検討を前提としています。この原則が求めているのは，何よりも学習者（利用者）の立場に立って辞書を作るということです。だが編者は，いかにして学習者の立場に立つことができるのでしょうか。そのためには学習者の能力と欲求，関心のありかや感受性を知る必要があり，現行の，あるいはあるべき教育形態を知る必要があり，学習者の言語環境を知らなければなりません。そして多様で変化の激しい学習者の言語環境を知り，その要求に応えるのは，実際にはきわめてむずかしいことです。それは具体的には，語彙や語義，あるいは例文や例句の選択，適切な訳語と訳文，必要な文化的背景の説明，挿絵やレイアウト，等々への配慮にも及びます。

私はこの「学習者に使いやすい」辞書というモットーが導き出す諸問題は，研究と教育における大衆化とデモクラシーの問題として捉え直すことができるのではないかと思っています。かつて外国，とりわけ西欧にかんする知識は，エリート階級の独占物でした。エリート階級は，自分たちが獲得した知識を自分たちの都合にあわせて，

学生や大衆に分け与える。私の学生時代（1950年代から60年代にかけて）には，まだそうした風潮が残っていました。それは辞典の作り方にも表われている。学界の権威，仏文科の主任教授や著名な言語学者が，弟子の研究者や学生たちを動員して作業を進める。しかしアカデミーの世界において偉い学者や学者を目指す人たちは，しばしば他の領域や社会の動きにかんしてはあまり関心を持たず，自分の学問的な狭い関心にあわせて辞書を作る。それは学術的に優れた辞書であるかもしれませんが，その辞書を使う人の身になって考えられた辞書ではありません。訳語は生硬で漢字が多い。例句や例文も文語的古典的なものが多く，日常生活で用いられる表現は軽視される。私たちの仏和辞典が成功した理由の一つは，私たちが教育の現場に居ながらも，可能な限り大学の制度的なものや師弟関係から離れた場所で仕事を始め，編者のあいだの平等な関係が守られたこと，さらに言えば私たちが言語学者であるよりは語学教師であり，同時に詩人であり小説家であり文学者や社会学者や歴史家であろうとしたことにあると思います。もちろんそのことがもたらす欠陥についても十分意識的である必要があることは，言うまでもありません。

しかしながら私たちに何よりも難問をつきつけたのは，「生きたフランス語」という原則でした。「生きたフランス語」とは「現に使われているフランス語」であり，また与えられた状況に最もふさわしいフランス語です。私たちは，フランスの現在の言語状況を的確に映しだすような辞書を作りたいと思ったのです。そこで私たちは現用法を重視し，語義順も歴史的順序ではなく使用頻度に従うことにしました。もっともこの方式は，一つの語がもっている歴史的発展の過程を示すことをしばしば犠牲にしなければならないし，また頻度数などというものは厳密には把握できないものであって，その判断は最終的には編者の好みや主観に従わざるをえません。だがより重要な問題は，その言葉や表現が，いかなる状況，いかなる地域，いかなる階層，いかなる年令，いかなる性[9]によって発せられているかでしょう。こうして「生きたフランス語」というスローガンは，結局，フランス語とは何か —— ひいては日本語とは何か —— という問いを改めてわれわれに突きつけます。

地方言語や方言と呼ばれている言語は，ブルトン語やプロバンス語やコルシカ語などフランスの各地で話されている言語は，フランス語ではないのでしょうか。ベルギーやスイスやケベックやモロッコやレバノンやハイチやグアルドループなどのフランス語圏で使われているフランス語はフランス語ではないのでしょうか。フランスの若者たちの使う言葉，あるいは彼らの使う英語や英語的表現は？増加する移民たちの言葉はフランス語ではないのでしょうか。あるいは，日本人である私が今ここでしゃ

べっているフランス語らしき言語はフランス語ではないのでしょうか。

域内の移動や居住の自由が保証され，移動と交流が激しくなった欧州連合（EU）の時代，あるいは世界における移動と交流が急激に増加している地球時代，フランス文化やフランス語とは何かが改めて問われている時代に，われわれはどんな仏和辞典を作ればよいのでしょうか。問われているのはフランス文化やフランス語だけではありません。日本文化や日本語についても同様です。現在，日本で最大の国語辞典（『日本国語大辞典』20巻，小学館，1976年）の編集長もつとめた倉島長正氏は，最近出版された著書『「国語」と「国語辞典」の時代』の序言を，「「国語」と「国語辞典」の時代は終焉を迎えようとしています」[10] という言葉で始めています。倉島によれば，『日本国語大辞典』は歴史的に見て最後の大型国語辞典となるはずのものです。仏和辞典の編纂を両側で支えてきたフランスの国語辞典と日本の国語辞典が，共に存立不可能を宣言しているとすれば，仏和辞典はいかなる根拠にもとづいて製作されるのでしょうか。

いま私たちは『クラウン仏和辞典』第5版の改定作業を進めていますが，改定の基本原則をたてるのは容易ではありません。「生きたフランス語」と「学習者に使いやすい」という二つの原則が維持されることは言うまでもありません。だがこの二つのスローガンの意味することは次第に変りつつあります。フランス語は世界のさまざまな国語のなかでも規範性のきわめて強い言語で，そのことは“Bon usage”という言い方にも示されています。フランス語が規範性の強い国語になるについては，絶対王政以来の長い歴史がありますが，とりわけフランス革命以後の国民統合において，言語の統合に大きな役割が与えられてきたことの結果である，と私は考えています。じっさいフランスほど政治や教育のなかで「国語」を重視した国を私は知りません。だがフランス語の規範性は現実にはすでに破られているのではないでしょうか。「古典的な規範フランス語（Bon usage）から，現代世界の変化に対応した生きたフランス語（le français vivant）へ」というスローガンが，現代の言語状況を映しだすことを目指す新しい仏和辞典の編纂原則として設定されると思います。そのためには次の三つの領域に特に注意を払う必要があるのではないでしょうか。

第一は，政治，経済，社会といった領域における変化の際立った部分に注目すること（例えば，EU関係，移民・地域問題，金融，情報・コンピューター関係，医療・老齢化問題，環境問題，フェミニズム，多文化・多言語主義，等々）。

第二は，古典文学や規範言語から日常生活の言語への視野の転換。そのことはハイ・カルチャーからロー・カルチャーへ，高級文化から大衆文化へ，成人男性文化か

ら女性文化や若者文化への視野転換を意味するでしょう。またいわゆる卑語，俗語，話語などの新しい意味づけも必要だと思います。

第三は，国語としてのフランス語の境界領域に照明を当てること。ここでは地域言語や海外領土，あるいは他のフランス語圏の言語，英語その他の外来語，若者や移民たちの言語，等々が問題になると思います。……

こういう暫定的な方針をたてて作業を進めながら，改めて気付くことは，国語や国民文化という概念の虚構性と，単一の言語や文化とみなされているものがいかに雑種的であり複合的であるかということです。単一文化，単一言語の複数性，あるいはクレオール性と言ってもよいでしょう。そうしたことは理論的にはすでにかなりの程度明らかにされているのですが，辞書を作る作業は，そうした現代的な課題に実践的にかかわって具体的な回答を出さなければなりません。かつて外国語辞典の製作は反照的に（酒井直樹の用語を借りれば「翻訳の対-形象化の図式」[11] によって）単一的統一的な自国語（日本語）の認識を生みだす役割を果たしてきたのですが，現在ではこの翻訳の図式は崩れかけているのではないでしょうか。

外国語辞典の問題は，「翻訳」の問題に新たな視野を開くと思います。「翻訳とその諸結果」と題されたシンポジウムに外国語辞典にかんするセクションが設けられたことの意義は大きいと考え，あえて自分の経験を述べさせていただきました。現在，「歴史的現象としての翻訳」は新しい段階をむかえています。最初に提起した世界システム論的な視点にもどって言えば，文化的な搾取－被搾取の関係におちいらない，平等な交流や平等な翻訳とは何か，それは可能であるか，ということが問われています。ポスト国民国家の時代においては，文化や言語やアイデンティティの定義とともに翻訳の定義も変らざるをえないはずですが，この問題はまた機会を改めて考えたいと思います。御清聴ありがとうございました。

注

（1）La traduction et ses effets -Chine-Japon-France（翻訳とその諸結果－中国，日本，フランス）という共通テーマを掲げたこのシンポジウムは，中国，日本，フランスから計25人の報告者が出席し，6月4日（パリ第八大学），5日（高等師範学校）の両日にわたって開かれた。報告・討論はフランス語で行われたが，本稿はそのときの報告 Problèmes contemporains de la traduction: élaborer aujourd'hui un dictionnaire Franco-Japonais をもとに訳出し加筆訂正を行なっている。

（2）国民国家と世界システムにかんしては，拙著『国民国家論の射程，あるいは＜国民

＞という怪物について』（柏書房，1998年）を参照されたい。

（3）幕末・明治期のフランス学や仏和－和仏辞典にかんしては以下の書物を参照。

西堀昭『（増訂版）日本文化交流史の研究－日本の近代化とフランス－』（駿河台出版社，1988年）

富田仁『フランス語事始－村上英俊とその時代』（NHK ブックス，1983年）

宮永孝『日本史のなかのフランス語』（白水社，1998年）

辞典協会編『日本の辞書の歩み』（辞典協会，1996年）

（4）以上の記述は幕末から第2次大戦に至る時代の和仏辞典編纂の主要な流れを追ったものであって，実際に出版あるいは編纂された辞典，単語帳，会話や文選，研究等々の数は，厖大なものである。詳しくは，西堀昭氏の作制された「フランス語研究書――幕末・明治・大正・昭和――（辞書・参考書・教科書）」（前記『日仏文化交流史の研究』所載）を参照されたい。

（5）現在出版されている仏和－和仏辞典の全貌を示すために，辞典協会から出ているカタログのコピーを以下に付けておきたい。時代の転換とフランス語の大衆化現象をそこに読みとることができるであろう。

'98辞典協会カタログ　フランス語辞典

林田遼右著 **大学1年の仏和辞典**	新書判 458頁 1900円 ISBN4-255-85006-2	はじめてフランス語を学ぶ人のための教科書専用辞典。基本的な動詞は活用形でもひける。文法事項を巻末にコンパクトにまとめた。	朝日出版社
島田昌治／林田遼右 ティエリト・ルード 会話作文 **フランス語表現辞典**	B6判 960頁 4369円 ISBN4-255-85008-9	仏作文・仏会話の力が飛躍的に伸ばせる。日本語とフランス語表現の微妙なニュアンスの違いをわかりやすく説明する。	朝日出版社
A・ヴルディラ／F・ジャコブ 並木　治／川村よし子 ディプロズ **フランス語会話マニュアル**	B6判 1542頁 一般・学生 7767円 ISBN4-255-89014-5	旅行からビジネスまで，生きた実用フランス語会話500をパーフェクトに収録。別売カセットで基本表現が聞ける。10000円	朝日出版社
福井／田村／他編 ロワイヤル **仏和中辞典**	B6変型 2144頁 一般・学生 4500円 ISBN4-01-071701-7	初級者から専門家まで使える仏和の本格版。重要語は用例・語法・注記など充実。表現欄・名句欄など囲み欄豊富。6万5千語収録。	旺文社
ロワイヤル編集委員会編 ロワイヤル・ポッシュ **仏和・和仏小辞典**	A6変型 864頁 一般・学生 2400円 ISBN4-01-075019-7	ポケット版最大の仏和5万，和仏8千語を収録。現代フランスを知る多彩な最新語・専門語，地名を豊富に採録した小型版の決定版。	旺文社

恒川邦夫／他編 プチ・ロワイヤル **和仏辞典** （二色刷）	B6変型 1344頁 一般・学生 4700円 ISBN4-01-075030-8	「フランス語で何と言うのか」だけでなく，語の使い分けや仏作文のポイントも具体的に指示した本格的和仏辞典。4万2千語収録。	旺文社
田村／倉方他編 プチ・ロワイヤル **和仏辞典** （二色刷） 改定新版	B6変型 1696頁 一般・学生 3700円 ISBN4-01-075051-0	初めてフランス語を学ぶ人のための学習辞典。豊富な用例とやさしい解説。類語パネルや英語索引など新機軸満載。3万8千語収録。	旺文社
アポロ仏和辞典	B6判 1124頁 3495円 ISBN4-04-012700-5	ラルース社の「アポロ仏英辞典」の日本語版。日本人向けに編集。収録語数約2万8千，二色刷り，英語併用，カタカナ発音付き。	角川書店
大槻鉄男／多田道太郎他編 **クラウン仏和辞典** 第4版	B6変型判　1776頁 一般・学生 3600円 (革装)4864円 ISBN4-385-11928-7	総収録語数4万5千。引きやすさ，使いやすさをさらに徹底。洗練度を増した訳語，利用度の高い用例7万余。重要語にカナ発音併記。	三省堂
川本茂雄／内田和博共編 新コンサイス **仏和辞典**	B6変型判 1520頁 一般・学生 4369円 ISBN4-385-12104-4	学習と実務に十分な7万3千語を収録。古典から現代文までを読み解く情報を収める。動詞に活用がすぐに探せる活用型番号を付す。	三省堂
重信常喜ほか編 コンサイス **仏和辞典** 第2版	B6変型判 1184頁 一般・学生 4500円 ISBN4-385-12155-9	十分な収録語数と豊かな用例で現代フランス語を伝える最新の和仏辞典。見出し語3万8千，用例8万余。付録に手紙の書き方など。	三省堂
伊吹武彦/渡辺明正/後藤敏雄 本城　格／大橋保夫　編 **仏和大辞典** ＜日本翻訳出版文化賞受賞＞	菊判 2652頁 一般・学生 27184円 ISBN4-560-00001-8	質量共にわが国において最高の内容を収めた仏和辞典。きめ細かい語義の分類，豊富な用例，語源の表示，シノニムの明示とその解説等。	白水社
井上源次郎／田島　清編 岡田　弘／中原俊夫改訂 **新仏和中辞典** 〔増補改訂版〕	B小型 1302頁 一般・学生 3107円 ISBN4-560-00002-6	見出語78000余語，小型仏和として収録語数は最大。重要基本語は特に詳しく解説。巻末に基本フランス語表・文法概要を付す。	白水社
杉　捷夫編 **新仏和小辞典**	B小型 652頁 一般・学生 2136円 ISBN4-560-00006-9	見出語34000余，中型辞典に匹敵する豊富な内容。基本事項はくわしく説明し用例は実例で示すなど使用者の便を考慮して編纂。	白水社

内藤陽哉／玉川健二 C・レヴィ・アルヴァレス　編 **パスポート初級仏和辞典** （二色刷）	B6変型　416頁 一般・学生 2400円 （別売CD）1460円 ISBN4-560-00032-8	超入門者向け学習仏和第2版。初版の親切設計に加え，和仏部の2倍増化，動詞活用形の見出語化，CD収録部明示，等実用性がアップ。	白水社
ジョルジュ・マトレ著 野村二郎／滑川明彦訳編 **フランス基本語辞典**	B小型 470頁 一般・学生 2427円 ISBN4-560-00009-3	フランスで外国人向けにつくられた権威ある基本語辞典の日本版。収録語五千，他の辞典に見られない豊富な文例を添えた理想的辞典。	白水社
砂糖房吉／大木　健／泉山武二編 **フランス基本熟語辞典**	B小型 335頁 一般・学生 2621円 ISBN4-560-00014-X	初・中級の学習に重要な熟語3千余を精選。適切な語義と豊富な活用文例に，語法上の注や関連語の指示も付す。学習者必携の辞典。	白水社
平山价弘編 **経済フランス語辞典**	四六判 511頁 一般・学生 6602円 ISBN4-560-00026-3	フランス語の経済用語を中心に，ビジネス界各分野に用いられる語彙を網羅した実用辞典。巻末に常用略語・略号。見出語1万9千余語。	白水社
日仏理工科会編 **仏和理工学辞典** 〔四訂版〕	四六判 712頁 研究者・学生 7767円 ISBN4-560-00023-9	理工学関係の学問領域の術語6万6千余語を収録。一般の仏和辞典にない専門用語を多数採録し，理工学研究者に簡便で必携の辞典。	白水社
日仏会館／日仏理工科会編 ベルナデット・ドゥニ著 **基礎仏和数学用語用例辞典**	四六判 165頁 一般・学生 3689円 ISBN4-560-00027-1	数学が国語教育の一環でもあるフランスの，中等段階で使用される用語を豊富な図入りで解説。日仏教育事情の相違も注解。	白水社
日仏料理協会編 山本直文 **フランス料理用語辞典**	四六判 332頁 一般・実務 3600円 ISBN4-560-00030-1	西洋料理界のバイブル『仏英＝和料理用語辞典』をフランス語にしぼって増補・大改訂。食材，菓子，ワイン，チーズ等も満載した。	白水社
千石玲子／千石禎子／吉田菊次郎編 **仏英独＝和　洋菓子用語辞典**	四六判 396頁 一般・学生 4660円 ISBN4-560-00022-0	専門用語6200語を収録した，字典と事典を兼ねた洋菓子総合辞典。初級者向けのカタカナ表記，逆引辞典など，簡単に使用できる。	白水社

P・セレリエ／J＝P・マヤール原著 西村牧夫／スランソワーズ・V・尾上編訳 **DSFフランス語法辞典** **－使える基本単語800－**	四六判 546頁 一般・学生 4369円 ISBN4-560-00021-2	基本800語の重要語義と可能な構文とを徹底解説。生きた用例（約6千）や適切な類義語・語法注により，使える語彙が身につく。	白水社
朝倉季雄著 **フランス文法事典**	A5判 404頁 一般・学生 3500円 ISBN4-560-00011-5	フランス語の学習者が正しく文意をとらえて綴り，話そうとするにあたって，絶えず座右において参照し得るように編まれている。	白水社
渡辺高明／田中貞夫編 **フランス** **ことわざ名言辞典**	B小型　280頁 一般・学生 2718円 （別売CD）1456円 ISBN4-560-00031-X	フランスの諺と名言1200余に訳と意味を付し，由来と出典を解説して日本の諺と対照。主題別索引・日本の諺索引・作者別名言索引付き。	白水社
高塚洋太郎／小方厚彦／山方達雄／矢島猷三／鈴木　覚／ジャン・ショレー編 曽我祐典／中井珠子 **コンコルド和仏辞典**	B6変型 1492頁 一般・学生 4660円 ISBN4-560-00024-7	引きたい言葉がすぐに見つかるように配慮した。随所に入れたオクリの活用で豊富な内容が更に数倍に活用できる。見出語3500。	白水社
三宅徳嘉／高塚洋太郎 田島宏/大賀正喜/山方達雄編 **現代和仏小辞典**	B小型 774頁 一般・学生 3107円 ISBN4-560-00029-8	豊富な情報量で時代を画した『新和仏小辞典』が，現代社会のキーワードを完備し，文字・判型もひとまわり多くリニューアル。	白水社
尾上貞五郎編／増田俊雄監修 **ポケット仏和辞典**	A6小判 702頁 一般・学生 2000円 ISBN4-8268-0103-3	ポケット型として最大の47000語を収容，文学・商業実務語，日常語などに特長をもち，使い易い実際的な学習辞典として最適。	博友社

（6）宗像和重「制度としての原稿用紙－その予備的考察－」（『文学』1998年冬，第9巻第1号）

（7）「余が言文一致の由来」（『二葉亭四迷全集』岩波書店，1966年，第5巻，171頁），他に「余が翻訳への標準」（同第5巻），「くち葉集　ひとかごめ」（同第6巻）など

（8）坪内逍遙は1891年，明治維新以後の文体の変化と混乱について論じ，翻訳文学によって新たな主導的文体が形成されるであろうという予想を述べている（「文体の紛乱」『早稲田文学』2号，明治24年10月，「外国美文学の輸入」『早稲田文学』3号，同年11月）。

（9）女性によって編纂された辞書は，これまでのところほとんど皆無といってよいだろう。Le Petit Robert の新版は，女性の編者が加わることによって，辞書に収録される

語彙や語義がいかに変化するかということを，われわれに教えてくれる。辞書はいぜんとして男性中心的世界であり，フェミニストは奪われた言語を奪回するために自ら国語辞典や外国語辞典を編纂すべきだという私の提言は，これまでのところ受け入れられていないようだ。

(10) 倉島長正『「国語」と「国語辞典」の時代』上・下（小学館，1997年）。

(11) 酒井直樹『日本思想という問題－翻訳と主体』（岩波書店，1997年），61頁。